

『季節』第5号(一九八一年)

日本共産党大阪中電細胞離党に至る経過について

元日共中電細胞
細胞委員 前田裕晤

はじめに

五月七、八日附アカハタは、多くの紙面をさいて私ほか二名の除名並に多くの同志〇十余名が、個々に脱党し、残る若干の同志もまだ中央の方針に疑問を持っており、全党のどこにもなかったような事態、つまり細胞委員会の壊滅を含む事態を報じている。しかも、それはトロツキストの若干の同志の影響のもとに起きた事態であるとしているが、事実はそれ程簡単に片づけられる問題でなく全同志が苦しみ、悩み、そしてその中から革命をめざして闘いつづけるのなら、もう脱党以外に道はあり得ないと結論づけるに至った個々人の苦悩の歴史は、単に一片の文書で処理してしまう性格のものではない。だが、日共八回大会を前に、今や全国の同志が日共の持つ矛盾をぬきにしてその成果をうたったところで、真に革命を目指す同志にとって、それらは決して素直に受けとることはできないだろう。除名されてから何度筆をとろうとしたかしのれない。だが経営細胞の中で活動してきた私らにしても、本名で公然とアカハタで発表され、真相を知らされぬままに放っておくことはもう許されない。不十分ではあるが、中電細胞がいかに悩み、苦しみの中にかかる事態になったかの経過を、私の知る限りを事実に沿って記す次第である。ある意味に於て、それは一細胞の発展の歴史であり、若き革命家達の真の道へと進む過程の記録でもあろう。

一、中電細胞の歴史

関西に於て、人的にも質的にも最大の拠点細胞といわれた中電細

胞も、初めから〇十名の党員がいたわけではない。レッド・パーヅによって、いったん壊滅した細胞を再建した。その出発は五名の少数からである。しかもその過程にあつては警察へのスパイ者や、全くの転向者も多く出し、どこにもみられるような状況の中で再建は始まったのである。映画サークル・文学サークル、その他のサークルを通じての活動家の結集段階、27〜30年の時期を経て学習活動に入っていた。时期的にいえば六全協迄といえよう。具体的に飛躍的に党勢が拡大していったのは、30年の後半より34年にかけてであり、党中央が全党的に呼びかけた倍加運動以前に、すでに十〇倍の拡大をなしとげ、組合活動に於ても主導権をとる勢力に迄発展していったのである。

大阪中電は、全電通として全通より分裂した民同派の発祥の地であり、長く組合機関も民同派の支配するところであった。その中であつてごく少数から出発したわが細胞も、青年層を中心に活動家を結集していった。その時期には今日のような事態になるとは誰も想像だに付かないことであつた。その間に党内に於て何の矛盾もなかったかというところではない。組合役員への立候補問題も、強い民同支配の中へ出てゆくことは、組合内の派閥の対立になるからやめてむしろ協力する中で党の影響力を広げてゆく見解と、逆に指導部門にも進出して指導の点からの影響をも併せてやるべきだし、主体的にも客観的にもその情勢にあると見る見解との対立もあつた。しかしそれらの見解の相違は細胞内での討論によって一致した方向を見出すことはできたし、基本的な対立にはならなかった。むしろ、かえつて各自の学習意欲を増し、情勢分析の出来る能力をもちたいと集団的な理論追求も行なわれたのである。

勿論、一般的な指導は上級機関からもあつたが組合内、及び経営

内での具体的指導は、はじめからなく、当然中電細胞としては独自に判断して活動を展開していったのである。

おそらくこの段階までは、中電に限らず他の細胞も同様であろう。相違点はネズミ算式に党勢が増加した点であろう。この点では中電細胞が特に強かったというのではなく、個人の悩みをも良き世話役としての活動から、個人的信頼をもとにして成立したのであり、その点で最後まで、多くの同志を有しながら、政治的影響を全体として発揮できなかった点、つまり党派性を独自に展開しえぬ弱点もっていたのである。

このような形の前衛党の存在という問題は、前衛党としての革命理論から活動方向に至るまでの検討なしには述べられない点であるが、今ここには述べない。一応の中電のアウトラインを知ってもらいたいからである。

この段階までは、全体としての意識の低さもあってそれほど問題も感ぜずに、中電細胞は党内討論を許し、前衛作りの作業に全面的に着手していったのである。

二、千代田丸事件

だが意識されなかった矛盾は32年の千代田丸事件——31年2月、朝鮮海峡にある米軍海底ケーブルの修理のために公社は、施設船千代田丸に出航を命じたが、それは李ライン内にあり、人命の点での問題、及び義務の点より千代田丸分会の所属する本社支部が出航条件について本社当局と交渉中、一方的に公社は出航を命じ、それに對し本社支部は交渉が成立するまで出航をやめた。その間に電通本部が中に入り一応出航を認められた形になったが、その後公社は本社支部三役に解雇を通告し、これに對し組合側は第九回全国大会で解雇撤回の原則方針を決定した。だが十三中委で「話し合いでの復職を

はかる」との戦術転換を行なったが、この間に本部と本社支部との対立を生じ組合員権のはく奪が決定され犠牲者扶助資金の中止となり、本社支部は独自に裁判闘争に持ち込み、全国的に千代田丸対策委員会を組織し支援闘争を組んだ。これに對し毎回の全国大会で本社支部より復権要求がだされ、問題となり、33年の全国大会（別府大会）は混乱に陥り続開大会（名古屋大会）で否定したが、34年裁判闘争に於て勝訴となり、復権は認められた事件。なおこの問題をめぐって全電通は本部を支持する民同派と反対派が真二つに衝突したのである。——

この千代田丸事件をめぐって党内に對立が生じた。即ち、「労働組合が公社から首切られた者を、更に組合からも除名するのは誤りである。直ちに復権させ、組合として反対闘争を組むべきである。」とする見解と、「だが目下の情勢で無理押しすれば組合の分裂となりかねない。今は民同との統一の必要な時であり、時期をみて復権をやるべきで今は本社支部提案に反対すべきである。」との見解の二つに分れたのである。

勿論、私を含めて若干の同志は「党としての立場よりするならば、どんなことがあっても妥協はありえず、階級闘争にまで至ったこの問題を統一が必要だからといって非階級性の方向を認めることはできぬ」として復権を要求したのであるが、日共電通関西グループは民同との統一、組合内の対立の激化を防ぐとの理由で民同派に同調したのである。だが、日共電通関東グループは積極的に本社支部の見解を支持し、ために日共電通内フランクは関東派と関西派の対立となったのである。

いかに「組合民主主義を守るため」との言葉をのべようと、公社からの弾圧に對し民同派中央が全くそれに便乗した形での本社支部

三役の組合からの放逐は絶対に許さるべきものではない。まして本社支部は全電通内の左派の拠点支部であり、又反中央派の旗頭でもあった。しかもこの本社三役は全国的にも有数の組合指導者であった。党中央はこの二つの対立について全く指導を發揮することはできなかった。当初関東グループの見解を支持しアカハタでも主張しながら、全国グループでは何ら統一の方針をださえず、鈴木市蔵氏は、「アカハタの主張は党中央の正式の見解ではない」と述べる始末であった。

この事は当然中電細胞にも影響した。強硬に復権を要求した私、及び同じく今回除名されたA同志の二人は「それ程強く復権を主張するなら離党を勧告する」との離党勧告を受けたのであり、更にこの問題に関する細胞総会での議題は、なんと「トロッキスト問題について」との見出しであったのである。正直の所私もAもこの時はじめてトロッキストの名をきいたのであり、トロッキーがいかなる役割を果たしたかは全く知らず、ただ単に裏切り者、帝國主義のスパイ位にしか思っていなかった。しかも、まさか自分達がその名で呼ばれようとは夢にも思っていなかった。まして自分達の主張のどこが誤っているのかなどはおよびもつかなかった。

入党して以来の党指定学習文献を読み、組合活動の中で知った理論には、そんな理論はどこにもない。まして前衛党たるもの、首切られた活動家を更に組織から放りだすが如きそんな前衛党が何のためにあるのかと。

この経験は、共産党に對して全くの無盲目的な信頼感を私達の中から消していった。そして、この経験は、この事件だけに終るものではなかった。以後の質上げ斗争にしても、労働条件の斗争にしても、常に民同中央との対決は抑えつけられ、それを破って強行した

ならば、直ちに統制違反とくるのである。幸か不幸か私達のこの問題は単に統制違反の点での自己批判書（もっとも相当年月をおいて後に）を提出したのでケリとなったが、これを書くにも内容をどう書くべきなのかわからず、内容も自己批判ならざる自己批判書に終ってしまった。

三、平和共存論争に至るまで

ようやくにして中電細胞は千代田丸論争より活発な学習意欲が目的的に追求せられるようになった。いわば無自覚的に党中央のもとでの活動が無批判的に受け入れられることだけではなにもならぬことがようやくこの段階になって全同志が意識するに至ったのである。労働学校へ通う者、また多くの理論学習会が新たに生れた。そして一部の職場では単に職場委員を中心とした活動家の層を拡げていった。班長会議はしばしば徹夜の泊り込みでもたれ種々の問題が討議されるようになっていった。

その頃、電々公社の合理化はそれに充分対処できぬ組合側を尻目に着々と進み津電報局の合理化反対闘争を迎えたのである。

三重県の一地方都市で起った斗争が何故重要性をおびるのか、それはこの斗争ではしなくも全国単一組織といわれながらも一層所々毎の分散的にしか斗争を指導しえなかつた電通中央の無指導に下部組合員はその枠をこえて連帯性を示して闘ったからである。津電報の組合員は充分な斗争経験もない中で分会執行部を中心に規制通信を完全になしとげ、同時に改式される名古屋・岐阜が充分な斗争を展開し得ぬ中にあつても闘いを続けたのである。

この時、大阪中電にあつては津回線をもつ職場がまず立ち上り、組合からの指令もない中に支援斗争を組織し独自に全局的にカンパが集められ、希望者を直接津電報に派遣して闘う実状を実際に体験

してきたし、その斗いぶりがまた活動家の話題になり、警官が津電に乱入した時は、直ちに全国に通信線で津の実状を訴え支援要請をしたのである。

だがこのことは後に、電通中央から指揮命令系統を乱した、つまり組織を無視したとの批判がでてくるのであるが。

この中にあって、中電の同志達は先頭に立って斗い始めて労働者の連帯性(同じ労組内だと、不思議と思われるかもしれないがこれが電通労組の実状なのである)を感じたのである。これらのことは砂川斗争の時にもあった。

テレビで警官と学生・農民・労働者との乱斗をみて直ちに派遣団を組織した例もある。だがこの時ほど直ちにとりくまれ、更に全国的に拡大させる努力は、はじめてである。

一方に於いての理論学習も党内に於て平和共存は否かの論争がでてきたのである。

労働者のインターナショナルは、ゆきつくところ国家の存在を認めない。

現世界情勢下において平和共存とは解放に至る過程での戦術的——外交辞令的にとらえるべきか、基本的に戦争をなくする点から平和共存そのものが戦略指標たりうるかとの二つの論が対立したわけである。だがこの場合だれもがこの論争の及ぶ所が、日本共産党そのものの否定の問題に至るとはとらえていなかったことである。ある意味に於ては斗争の経験の中からでてきた問題であった。

だが党内情勢はそうはさせなかった。つまり全学連と党中央の対立、六・一事件、及びすでにパンフ活動をしていた黒寛や太田竜の影響、ならびに京都府委員、大屋史郎の除名問題などが相ついでおきていたのである。

全く非民主的官僚的なしめつけが知らされるに及んで、そのあまりにも重大性にびびりぎょうてんしてしまったのである。

もう党の権威は従来の如きものではなかった。一枚一枚具体的にベールがはがれた日本共産党の姿にわれわれはどう受取ってよいのか、なすべしを知らなかった。

「大阪だけはちがう」「北地区だけは」「いや大阪中電だけはあんな姿じゃない」と我々は会議でその問題がでるたびに確認しあい、あるべき姿は、まさに中電細胞であり北大阪地区の姿なのだと思ってきた。

11・27の国会突入事件がおき、よくやったと感じた我々も、アカハタでは全くの分裂行動としてのおつかいには面喰ってしまった。だが状況は刻々と進んでいった。

六十年の正月を迎え、一月十六日の岸渡米の日が近づいて来た。安保国民共斗会議の呼びかけに応じ、大阪中電からも職場より六人の代表団が上京することとなった。

出発の日、代表団の壮行会をかねて、大阪市内電通各支部の青年のつどいもたれ、必ず岸を渡米させるな、飛行機にすがりついても阻止せよとの支援の声に送られて大阪代表団の一員として出発したのである。

だが東京に於ての共斗会議での共産党のみが羽田行きに反対したなんてことはだれもが知らず意気ようようと汽車にのりこんだのである。だが列車の中に於て、羽田行は中止の方針が伝わるや中電の代表団はフンガイし、またその時すでに全学連は羽田に坐り込んでいたのであり、警官との衝突をラジオは報じていた。

早速列車内に於ての全員の討論を要求しても、それは「夜中にうるさい」とか「明日にしろ」とのば声で消されてしまった。

そして中電内に於ても当然のことながらその成り行きに関心をもち、また「探究」その他の雑誌を読む者もでてきたのである。その中にはじめてかくされていくトロツキーの多くの著作、彼がロシア革命に於ていかなる役割を果たしたのか等が語られるようになった。

注意せねばならぬことは、これらのすべての疑問は全同志の前で、またあらゆる党内の会議でだされ論議されてきていたのである。我々はその段階でも、いや最後の段階に至るまで、党よりでるなんてことは夢にも思わず正直に疑問点を提起し、又それは論議されてきたのであった。

故に、連日、アカハタにのる学生党員の除名も、又京都府委員会事件も首をかかげた。

つまりどうしてこんなことに、との疑問を感じたほどであり、何故もって党内で論争がされないのかと不思議に思ったのである。

しかし、上級機関から平和共存問題については綱領の問題であり、それは綱領論争として小委員会を設置して討論する、その他の会議での発言は禁止するとの処置がでてくるようになり何かおかしいと感じるようになったのであった。

かくしてはじめて、前衛党とは何か、と根本問題からの各自の追求、及び現在日本資本主義の分析等が実際問題としてなされねばならぬ段階になったのである。

その中で七回大会を前に、社会主義革命か、二段階革命——民族革命かの問題も切実に取り上げてくるに至った。

四、安保斗争の中で、かくして安保斗争を迎えた

だがその前に、港地区の集団脱党事件がある。

それは当初、アカハタの記事でしか知ったにすぎない。しかし港地区党報が読まれる中で「現代の理論」廃刊問題、及び港地区への

その間に多くの問題をかかえて、東京駅前国労会館に一担落ちついた大阪代表団は激論が交され最終的には大阪府学連と共に大阪中電代表団は全員羽田へ車をとばしたのであった。そして羽田でみた英雄的な学生連の斗い、右翼と警官の中で包囲された中において尚も斗う姿に、今まで想像もしていなかった光景、つまり共産党こそあらゆる斗争の先頭に立つとの概念は一辺にふきとんでしまったのである。

そして学生に交った少数の労働者の姿に拍手を送りデモに参加した時、労働組合の旗はただ一本、大阪中電の青年行動隊旗しかなかった。その日の午後、日比谷公園へ向けての全国からの参加者及び地元のデモ隊が雨の中を行進が数限りなく続くのを見た時、何故これだけの数が羽田へ行かなかったのか、とあらためて指導部の無能性、いや不在の問題を感じざるをえなかった。

だがこの問題はそれだけではすまなかった。

大阪平和を守る会機関誌にのせたO同志の当日の状況の報告は大阪府委員会から調査を受けるしまつになり、また当初、当日の行動は羽田へ行くべきであったとしていた府委員会も、西川問題が党中央より摘発され、大阪府委員会が全面的に党中央に屈服することによって、大阪府党の情態は全く逆転してしまった。北地区党会議に於ても、もう中電細胞の党中央の指導の指摘は、もはや少数者でしかなく、府委員会の自己批判の不明朗さの追求も、むしろ中電細胞が異端視されるのを助長するにすぎなかった。もう中電細胞として党の姿に何物を見いだすことはできなかったのである。

だが、まだまだ中電細胞は健在であった。細胞会議に於ては羽田事件も論議され、あの情勢下において党としては当然羽田へ行くべきであったとの結論をだしたのである。これは単に羽田へ行くのが

是非かの問題ではない。

あるべき前衛の姿として、すでに斗争がはじまった場合、我々はいかなる態度をとるべきであるのかとむしろその点に触れる問題であるのだ。

の間、長崎造船細胞の脱党事件、アツミ農民細胞の脱党と相つぐ事態をみて中電細胞は独立共産党細胞として、やってゆく以外に道はなくなってきたのである。

かくして各同志の理論追求は国際共産主義運動に、経済分析へと進み、その中に構造的改良を指向する部分と、革共同に同調する同志と、共産同を支持する同志達がでて来たのも当然の成り行きであったといえよう。

だがそれよりも党より去って行くことは誰れもが考えなかった。党内斗争を展開しよう。そのために理論学習もしよう。と全同志が取り組んだのである。黨員倍加運動に対しては単に量的な拡大のみを計るのは誤っている。質の問題も考えるべきであり、すでに中電細胞の場合、〇十余名の現勢を倍化することは考えられなかった。

かくして、この情勢の中で61年を迎えたのである。

五、除名事件が起るまで

安保斗争を経験して、その中で共産党のあるべき姿を見失った中電細胞はそれでも労組内であつての斗いに、また理論学習へと活動を続けてきた。

せめて中電細胞だけは、との相言葉のもとに、だが各同志の指向が次第に明白になるにつれ、脱党した後も活動を続ける部分との連絡は続けられた。私のところにも各潮流の機関紙は送られてきた。その時、他地区の某同志より、各潮流はどんな思想をしているのか説明してくれないかととの相談があり、又私も某同志に、ご親切にも各

々の政治潮流の機関紙をそろえて研究してみると渡したのであるが、それが直接府委員会へ某同志の上申書と共にあげられ、府委員会からのいわゆる中電事件の摘発が起きてきたのである。かくして私は中電細胞より離党勧告がされたのである。

私自身も迷った。今の党に革命を期待することはできない。だが党に結集している若き活動家はやはり最良の部分である。彼らをそのまましておくことは一体どうなるのか。とはいえず中電内にあって私が個人的に離党することが問題の解決になるのか、とにかく一度所属する班に問題提起をして同志達の見解をききたいと思ったがすでにもう会議を開く余裕はなかった。私個人の招集と、私個人の責任に於て親しかった同志に集まってもらい、相談してみた。だが各同志の見解はすでにもう党内斗争を展開する時期に来ている。前田個人の問題ではない。中電細胞として処置すべきであるとの見解が圧倒的にだされた。三月七日のことである。

翌八日、緊急細胞委員会が開かれた。そこで九州会議の件、某同志への文書手交の件が組織違反として論議された。細胞委員の多数は党中央の立場に立っていたのではない。だが中電内に於ての活動を維持するために、及今が党内斗争の展開すべき時期かどうか、まことに前衛党内に於てその党内情勢を論議して党内斗争の戦略戦術を論ずる奇妙な形があらわれたのである。

細胞委員各自の真剣な討論が続いた。この問題を前衛党としての理論的な点とみるか、或は単に組織違反の問題なのか、一部からは前田を細胞委員に選んだこと、及び自分も一票を投じたことの自己批判やら、もう基本的にどう我々がこの問題を受け取るのかの点についても一致するに至らず遂に次回の細胞委員会で結論をだすことにして、次回は六日のうちの三月十四日に決め、又地区からの査問

は三月十六日に行われるとの連絡もあり、会議は結論をみいださぬままに散会した。この討論の内容や個人的発言までも今書くことはできない。それがないと充分でない知りつつも、まだ残って活動している同志たちも居り、又その他への影響があるからである。

又各同志達の思想傾向も私にはわかってきた。今後の階級闘争を考えるとやはり今発表はできない。まして当時、党中央への信頼はなくなっても、まだ中電細胞への信頼は失ってはいなかったのである。各自の立場がわかりながらも今後の発展のためには今いかにすればよいのか、その点で過去の党活動ははたしてどうであったのか。と、多くの問題はまだ否定しながらも、党の再生へと、はかない望みを託していたのである。

だが三月十三日、事態は急変したのである。

当日、五時前に、地区委員長ともう一人の地区委員が私に会いたいとの伝言があり、私も予定があるが一時間位ならばと承知した。五時面会との連絡でおけると、地区委員二人がいたが、「今日ぜひとも君に話したいと地区委員や府委員が来ているから会ってほしい。」「約束が違う、地区委員長ともう一人の人が一時間ほど話したいという事だっただけではないか。」「いや是非とも今日だ」「車をもって来ている。君は査問だ。いやでもつれていく」「おかしいではないか、査問は十六日だろう」「十六日ではおそい、今日やるでくれ」と口論が続いた。

五時というのは、平常勤務者の退局時である。すでにこの情勢は大衆に迄広がっていた。

ひよっと出口をみると、そこにはトヨベツトが横づけられて居り、市川府委員や、地区委員のほとんど全部計二十人程がまるでスクラムでも組むような態勢で私がでてゆくの待っているではないか。

その時、中電細胞のC同志が窓越しに目で合図をしてくれた。危険だという意味であろう。私は勤務状況を見てからゆくと返事をしてつかまっていた腕をふりほどいて局内のエレベーターにのって虎口をのがれたのである。

六階食堂に行くと同志達が集まっていた。

軟禁だ、強制査問だ、泥をはくまで何日でも軟禁するらしい、とかいろいろの情勢が語られ、窓から下を見ると、まだトヨベツトは横づけで、丁度犯人たい捕の如き体制で彼らは待ちかまえていた。多くの同志たちが興奮して食堂に集まってくる。今まで見解の対立していた同志たちも下へ降りては彼らの動向を調べて報告してくれる。その間細胞委員長や細胞常任委員たちが彼らと口論をやったのと、とである。つまり大衆の面前で何事をやるのかというわけであり、事実、一般大衆は「共産党ってこわいところね」とささやきあっていたのである。私もとうとう午後九時まで約四時間局よりでることではできなかった。

また「下宿におしにかけても、どんなことをしてでもつかまえる」との情報があつたため、その日から知人や、友人の所へと転々と姿をかかす破目になったのである。

かくして私は十六日、地区よりの除名通知をもらったのである。この事件がいわゆる乗用車事件の真相である。だがこれは中電細胞内に大きなショックを与えた。党中央に「不満不信をもちつつも党内斗争と言っていた同志達までかくの如き六全協前の状態と何ら変らない事態の中では、もう留り得ないという者、大衆に与えた恐怖感は今までの築いて来た党の信頼は失われてしまったとして憤慨するもの、おそらくこの時に、多くの同志は各自が個々に決意したのであろう。

三月十九日、緊急細胞総会、府委員二名、地区委員、全員出席しての異例の総会、勿論私は入口で追い帰されてしまった。ここでまず私の除名は確認された。この点、何故中電細胞の同志が私の除名を確認したか、それは地区、府に対して闘いはじめる前に、全体となって闘う時期をかせぐためであつたらう。

だが会議は「乗用車事件の思想的あり方はマルクス・レーニン主義とは縁もゆかりもないものであろう。今回の事件によって失われた中電細胞の信頼を回復する適当な処置が出され乗用車事件の府地区の自己批判がない限り、地区・府の指導を認めない」との結論を満場一致で決定してしまつたのである。

顔色を変える府・地区委員をのこし、全員は退場してしまつた。かくしてこの三月十九日の細胞総会が中電細胞の崩かいの総会になつたのである。

以後我々は今後の対策を含めて幾度となく討議をした。

府委員や、地区委員の中には中電の落ち入つた状態に内心同情を示しながらも何の発言もできない同志達もいた。党内斗争を今やらねばと思ひ、党の再生革命党へと誰もが同じ思いをもちながら、もう口外すらできないことが我々にもわかつてきた。我々は北大阪地区委員会及び地区党こそは日本一の地区であると思ひ信じてきた。誰もが卒直に自己の見解を発表し、誤りがあればまた批判もした。千代田丸事件にしろ、平和共存論争にしろ、私をも含めて自由に論議してきた。勿論決定は、私の意見は少数意見だつたが、それはそれとしてもまだ活発な討論は許されており、そして相互に党の発展につくしてきた。だが党は、あたりまえのことだが全組織的な全国的な党なのである。

我々の見解、或は北大阪地区の如き民主的な運営が他地区でも当然

する、開封される。だが我々は決してひるまない。

長い党生活をふり返つてみた時、若き熱情は全く党活動にそがれ、今の瞬間になつてもまだ断ちきれない愛着を感じる。

だが我々は知つた。共産党、前衛党とは我々の一人一人がそのようなであることを。

厳密な、最も科学的なマルクス・レーニン主義理論によって武装されたものが真の前衛党であることを。それ以外の権威は何物もすべてまやかしかつ物である。また理論そのものも我々の一人一人が主体的に実践し、また理論化する以外にありえないことを身をもつて知つた。

いかなる正しい方針であろうと、受けとめる我々が無批判的にそれに従うのは誤りである。必ずそれは自己のおかれていゝ中で主体的に受けとめ、実践に移さねばならない。その意味で今はじめて我々はコミニニストへの道を一步踏み出したのである。

すでに大阪府委員の四人の同志、千代田地区の同志たちも、自由分散主義的、或は反党分子として、また春日中央委員も脱党の段階に來てはいる。私はそれらの同志たちがすべて私と同じ見解であるとは思わない。だが自己の理論が主張すらできない現状の日本共産党の姿が前衛の姿であるとは思わない。また、安保・三池のあの激動の斗争を経験しながらも、現在日本資本主義を把握することもできず、今だに五一年綱領の焼き直しでごまかそうとする日本共産党、常に党の方針をいかに誤りであろうと正当化するその姿、もうそこに何を期待したらよいか、良心的な黨員は悩み苦しむ、必ずや、中電細胞のごとき形を経験するであらう。

だが、我々は闘う現今の階級斗争の時期に、まともな方針すら出せないものに、前衛と認めることはできない。今、数が少くても

なされていると考へていたが事実はそうではなかつたのだ。

港地区の例や長崎の例もきいて、たがどうも身近かに感じることができなかつた。それが現実に中央からのしめつけ、府委員会の自己批判・地区の段階とおりてくるに従ひ、もの見ごとに従来体制は崩かいしてしまつた。中電細胞のはたしてきた役割を知っている地区委員の若干の同志や府委員の同志達は苦しかつたことだらう。

平和を守る会・コーラス・松川を守る会・日ソ協会等々・民主団体の活動家には必ず中電の同志たちが活動していた。今後どうするか、その問題は単に中電細胞に限らず、多くの大衆団体に又労働組合に影響を与えることになるのである。

しかし、府及び地区は更に追討をかけ、A・Iの二同志をも除名処分にしてしまつた。

もう誰もの顔には希望の色もなかつた。各同志の中には地区委員会へ直接脱党届を持ってゆくもの、また細胞長に渡すもの、かくて細胞常任委員全員と細胞委員はわずか三名を残して全委員が及び〇十余名の同志は脱党届を提出してしまつたのである。

私個人の見解では、残る者は残つて党内斗争を積極的に行ふべきだと思つていた。しかし、もう大勢はいかんともすることもできない。これだけの多数が脱党しながらも、一致して離党声明すら出しえなかつたところに、中電細胞の深い苦悩の姿がでていゝのである。

五、我々は何を学んだか

中電事件はトロツキストの影響の下にといわれていゝがそうではなかつたことはおわかりになつたことと思ふ。以後、大阪近辺だけでも、吹田地区委員会の処分、尼崎地区委員の綱領問題に關しての処分等、続々と官僚主義的弾圧は續いていゝ。権力側の弾圧も目に見えてきだした。公安調査庁は公然と押しかけてくる。郵便物は紛失

の火は全国の闘う同志たちをふるいたたさずにはおかないであろう。そして官僚主義、代々木とそれこそ我々は別離して闘うことを宣言する。

我々の前には國際的権威を背後に、ただ官僚主義的にしかなされぬ党、しかも階級との闘いを忘れ、社会党にへばりつき自民党の一部にさえ色目を使うベッタリズムの権威主義者の妨害をけつて革命の道に進む。

まだ党内に残る同志たちよ、中電細胞の経験をもう二度とくり返してくれるな。

そのためにこそ我々の未来は開けるのだ。

目的は何か。目的は何か。

障害物をとりのぞけ。

そして未来社会・新社会建設のために、一人一人の同志こそが闘いの主体であることを、その中でこそ始めて民主主義的であり、且つ規律は保ち得る。

そのために、そのために、私達は常に闘いをすすめることを、この教訓を学んだのである。

全同志諸君、

闘いの火をかかげよう！

一九六一、七、十

大崎 悟

日共大阪中電細胞は一九六一年三月に完全に解体した。警職法から安保と、戦後史を語るに最も重大な政治闘争を経過したあとで、自らも、他からも日共経営細胞の最大拠点とみなされていた細胞が完全に解体したのである。丁度一年を迎えんとする今尚も混沌状況の続く左翼戦線をみる時、単に大阪の一地区で起った離党事件としての性格を持つものではなく、これは真剣に革命主体として、階級戦線に介入しようとしていた労働者が、前衛不在を確認して、即ち日共に前衛としての位置を与え、自らもがそれに参加した自己を、その中で与えられた実践と学習の中から尚更に、コミニニストとして位置づける以上は、日共にとどまることは出来なかった一例として、その意味に於て、安保以後、各地に於てみられた離党事件をも含めて、現在の労働者の前衛観の問題としてとらえることができると思うのである。

であるから、単に日共大阪中電細胞の離党に至る経過を書くというのではない。あくまでも、我々が、中電細胞建設の第一歩から様々な闘争を経て、大細胞に発展させ、そして集団離党という一区切り迄の中では、一体我々は前衛を何ととらえていたか、安保闘争の中で、学生達が、血を流し先頭に立って闘うのを、我々はいかなる状態でそれを見ていたのか、すでに階級政党的位置を放棄した日本共産党に、共産主義者として自己を守る以上とどまり得ないとし

て、訣別したにもかかわらず、この一年間に組織らしき結集体をも作り得なく、いたずらに組織不信の中で、自己を苦しめつづけて来た我々が、何故、中電労働運動研究会として結集することを得たか、その間の状況こそが、まさしく左翼労働者の思想状況の反映として受取めることができるのではないだろうか。

いかに「前衛不在」の言葉が語られようとも、現実に階級闘争の激化しつつある今日、その主体を指す我々にとつては、その言葉ほど我が身に鞭打つ言葉はない。

日共八回大会を前後して、いわゆる春日一派の離党問題が起きた。だがこれにしてもおかしな話である。少くとも七回大会に於て三分の一以上の代議員をもった彼等が、どうしてあのぶざまな状態を示すことはできなかったのか。いくら脱党後に於て、自分達のそれ迄の行動を合理化しようとも、又、宮頭一派の私物化された日共と叫ぼうとも、それは犬の遠吠えにしかすぎない。

日共は相も変らぬ矛盾だらけの党章のもとで、歌えおどれの民青を拡大しつつあり、又それとは裏腹に、革共同全国委員会は、目下の急務はいかに自己を革命的マルクス主義で武装させるかと、黒寛独特の哲学？をもつて火事泥の如く、旧共産同の主要メンバーを吸収し、オベンチャラ坊主、側近政治の前近代的雰囲気、いかに哲学で誤マ化そうとも、それは現実の階級状況には何のプラスにもならない。

かかる左翼の分布状況を見た時、尚も全国で、真の前衛を目指し苦悩せる労働者の存在する今、中電労働者の現在に至って達し得た前衛観を語る事は、全く必要なことであると考えるのである。

かつて安保闘争に於ては、共産主義者同盟は、新左翼として華々しく登場し、当時の全学連を掌握し、また多くの労働者はその中に

新しき革命主体を夢みて参加した。だがその主体自らが、あの激烈な闘争を闘ったのちに、充分な闘いの総括もなし得ず解体していった状況、それは、単に共産主義者同盟の没理論のせいにするのではなく、いままでの共産主義運動のなかに、まだ理論として体系化し得るものでなかったことを、最も端的に示したのではなかったか。それ故に、共産主義者同盟中央指導部に於て、分派闘争ともいえない闘争を惹起させた部分は、単に理論の問題に転嫁させ、一度も闘いの場に主体を置いたことのない黒寛に、理論の低劣さを指摘されるや、ものの見事に、転身を行い得て、尚ものうのうと、今迄の自分達の行動をたなに上げて、革命を語り、平然としている状況を生みだしている。

理論とは何か、前衛とは何か、実践とは、それは単に抽象的言辞を弄するのでは何の価値もない。かかる現実が、左翼の状況であるにもかかわらず、我々は尚もマルクス主義者として、自らの手で主体を追究しようとしている多くの労働者の苦悩の中に、新しき革命主体の芽を見出す。その状況を大阪中電という一つの場を媒介にしてとらえなおしてみたいと思う。

日共大阪中電細胞、それは関西に於ての最大拠点細胞として、また電通内に於ても戦闘的組合の一つであり、〇〇〇名の党員を擁し、組合活動の分野のみならず、地域活動に、日ソ、日中友好協会に、文化運動へと、大阪のあらゆる運動に活動家を送り、自他共に最大拠点と許する組織であった。

勿論、中電細胞も、初めから巨大細胞であったのではない。レッドページによって、全通の中でも、多くの闘争を指導した部分は職場より放逐され、更に、全通よりまず最初に第二組合（現在の全電

通）の発生地として、レッドページ以後、長く民同幹部によって支配された所である。その中に於て、僅か四、五名の小細胞から出発して、若き活動家を、文学サークル、映画サークル、コーラス等、全く当時の日共の組織拡大の方針通り、サークル運動の中から急速に拡大していった。若き活動家は、更に学習会に組織され、それはまたたく間に共産党へ加入していったのである。地区の常任のなり手がない時は、中電細胞の中の有能な同志は、職をやめ常任活動にとびこんでいったのであり、大阪での模範細胞と評価されたのも、極く当然の成行きであった。この点、日共の典型的な方針通りに成長した細胞であったのである。

新入党員は、感激をもって入党の抱負を語り、整風文献を贈られ、個人の利益を党の下におくと決意して、仕事の点に於ても、すべての点にわたって労働者の模範とされる人間となり、苦しい仕事は率先して引受けると、まさに、整風文献通りの党建設と党風を強化させつつのびていった。

矛盾が起きた場合、まず自分の方には誤りはなかったかから出発して万事物事をみよというかかる典型的コースの細胞が何故あのように集団脱党に至ったか。その原因は安保よりも、学生の六・一事件よりも古く、電通の千代田丸事件に始まるのである。

千代田丸事件とは、朝鮮と長崎間における米軍の海底電線の施設を命令した電々公社に対し、所割支部の電通本社支部が、ライオン問題で、韓国軍が軍事行動を起していた時でもあり、生命の安全、更にもその米軍海底電線迄もが、電通としてせねばならぬ業務であるかどうかで、公社当局と対立し、本社支部は海底施設船千代田丸分會に出航拒否の指令を出したのであるが、これを業務命令違反として、本社支部三役を解雇した事件である。

これに対し、本社支部は直ちに反対闘争に取組んだが、電通中央本部は、反対闘争の方針に於て本社支部と意見が対立し、全くおかしな現象だが、本社支部三役を組合から除名する方針をとったのである。以後、毎年の定期全国大会に於て、復権を要求する本社支部代議員と、中央本部との論争が始まるのであるが、その間、本社支部側は千代田丸対策委員会を全国の活動家間に組織し、電通では民同派と本社側一日共及び無党派活動家の二派に分れて内部闘争が展開されたのである。

この時、九州大会は結論を見出す事が出来ず延期となり、職場段階迄、復権是非の討論が行われたのであるが、当然大阪中電に於ても復権賛成で、民同幹部と対決する筈の細胞は、関西電通日共グループの決定によって、たなあげを策したのである。理由は、現今の情勢に於て、民同と対決するのはまずい。むしろ共同して闘わねばならぬ時期であるとするベツタリ方針なのであるが、これをめぐって中電細胞に於ても完全に二つの対立が生じたのである。

我々は階級政党の一員として、「労働者にとって最もひどい攻撃を受けている時に、労働者を守る立場にある組合が、除名するのはおかしい。更に階級政党の立場から見ても、当然これには反対すべきである。統一戦線というのは、何もかも自己の主張を押しつけて、妥協のための妥協をするものではなく、見解の相違は明確にした上で、なされるべきものであり、しかも首切り問題に関しては労働者として生存権の問題であり、漸固階級性を貫いて、復権闘争に参加せねばならない」とする主張と、関西グループの見解との対立であった。当時の中電労研（現在の中電労研と区別するために第一次労研と呼ぶ）に集っていた党員は、関西グループの見解は非階級的であるとして、機関誌「労働運動研究」に本社支部三役問題を特集し、

争の意識的究明等が、若干の同志達によって行われたしたのである。

千代田丸事件に対しての日共の見解（最も関西電通グループの見解ともいえるが）から、第一の疑問点が始まったとすれば、「現代の理論」廢刊問題から東京都党問題、全学連大会前の代々木に於てのいわゆる六・一事件、国鉄新潟闘争への指導問題、砂川闘争等によって、益々疑問が生じてきた。

更に、五九年に入ると、杉浦民平の一連の小説にでてくる渥美細胞が離党する。東京での最大拠点地区といわれていた港地区委員会が査問だ、違反だといっている間に離党する。とすると今迄、読め読めと進められてた杉浦氏の「細胞生活」なんかは、読んではいけないとの指示がくる。これらの事件は、真剣に受取らざるを得なくなってきた。

一体彼等は何のためにやめてゆくのか、少くとも中電の我々にとって、彼等の見解が誤っているとは思えない。しかも彼等は離党後に於ても、活動を放棄するなんて一言もいわぬ。むしろもっと積極的に展開すると言明している。果してこういう事は存在し得るのか。だが、当初、我々にとつて全く幼稚な疑問も、十一・二七事件といわれる学生・労働者の国会乱入事件に対するアカハタの記事を読んだ時、全くガクゼンとせざるを得なかった。

中電の同志達は、国会乱入のニュースを聞くやこどりに喜び、もし我々が東京にいたのなら、まっ先に入ってやる。よくやった。あそこで小便したら気がいいだろう。等々の言葉が出ていたのである。だがアカハタでは、挑発者として非難され、一部ハネ上り分子の策動ということになっていたのである。いついかなる闘争に於ても、先頭に立ち、弾圧を受けるのは、まっ先に共産党と信じてん

電通内において、唯一の左派の拠点本社支部にかけられた、公社と民同のなれあい攻撃に、労働組合本来のあり方、首切りとは最高の敵の攻撃であり、更に、電通の第一次合理化が実施されるにあたって公社が左派の拠点本社支部に、意識的に加えた攻撃であるとして、中央本部案反対、即時復権賛成の見解を出したのである。

しかるに、労研に於て中心的メンバーであった二人の同志に、細胞は関西グループの決定違反として、組織問題としてとらえ、トロツキストとレッテルをはり、離党を勧告するに至ったのである。勿論日共関東グループはこの時点で完全に関西グループとは対立したのであり、日共中央もが、その調停に充分な方針すら出し得なかったのである。

今迄、共産党とは、革命のため、労働者の利益のため率先して行動の先頭に立つべきものであり、他に前衛政党とはあり得ないと信じ込んでいた党員達にとって、この事件は一大衝撃であった。その時迄の共産党観とは、全く誤る所のない、完全無謬の科学的判断の上に行動をなす政党、前衛との信頼感が、自分達の上に、具体的にその非前衛性を暴露しだしたのであるから。

しかも、漸固主張したメンバーに対して離党を勧告したのであるから、更にその見解をトロツキスト、と呼んだのであるから。当時、中電細胞の殆どが、トロツキストとは裏切り者として知らされていず、またトロツキの著作など読んだ者もいなかったのである。

その時点から中電細胞の中に於て、具体的に従来の「前衛観」に対しての批判検討が始まったのである。

具体的にロシア革命の歴史をひもとけば、そこに於けるトロツキの果たした役割がいかに重要であったか、更に、六全協前の分派闘

でいた我々にとつても、もはや、それ迄の前衛観は全く通用しない事と、いやでも知らざるを得ない状況に立入ったのである。

それに致命的であったのは、六〇年一月十六日の羽田事件である。安保反対闘争は高揚し、大阪中電からも六名の代表が、岸渡米阻止大敗代表團の一員として参加することとなり、前日の十五日には全大阪電通青年の集いで、絶対に岸をアメリカに行かせるな、飛行機にカジリついて行かすなと、激励を受け、汽車に乗り込んだのであるが、途中、安保反対共闘会議の方針変更、それは共産党のみ反対が全部をつむむ形となり全学連のみが孤立する様相を呈しだし、大阪代表團はどうするかで、遂に結論を出さぬままに東京に早朝着いたのである。大阪中電代表團は、戦場から送られて来たのであり、今変更はできぬと、単独羽田へとびだしたのである。そこで見たものは何か。雨の中、右翼が六尺棒を持ち、完全武装した機動隊を相手に、全学連の学生が泥にまみれ、顔を血だらけにし、尚も闘う姿ではなかったか。

共産党の旗一つ立たないその中に、あるのは各大学自治会旗と、僅か一本、大阪中電青行隊旗しかなかった。代表団員の殆どは、共産党員であったが、その時程、自分が共産党員であることを恥しく思った事はない。

我々は入党直後、整風文献で何をたたき込まれたか、闘いの先頭に立ち、そしてそれが誤りであるなら、その先頭に立って、誤りを阻止する姿ではなかった。

当日の午後、渋谷宮の下公園から日比谷公園へ向けてデモをした時、雨の中をついて、数限りなく集る労働者のデモ、共闘会議の宣伝車に向かって何故我々を羽田に行かせなかったかと、憤り叫ぶ労働者、この中に、もう我々は完全に共産党の前衛としての位置をみ

なくなっていたのである。

以後大阪中電細胞は、中央はナンセンス、だが、せめて大阪中電だけは、の相言葉のもとに、電通内部の状況に關しても何の指導もない中で、我々だけの意識の活動を続ける事態になったのである。

中電内に於ても、先進部分で積極的に、新左翼部分と連絡をとる同志が出てきた。革共同関西派、及び共産主義者同盟、更にムーアの構造改革派部分の三潮流であった。この間、大阪平和を守る会の機関紙に、一・一六当日の状況のルポを書いた同志には、府委員会よりの査問の内容を持つ文書が出たりしたが、我々は中電細胞総会に於て、安保に反対する現在の情勢の中で、党は明確に指導をなすべきであり、一・一六は当然戦術的にも羽田に行かせるべきだと結論を出したのである。

六〇年は安保と三池で終った。

と共に、共産党の非階級性も、ものみごとに暴露された。だがまだ我々は幻想をいだいていた。八回大会がある。まさか八回大会で、この現状を、全国の同志達が、黙認することはあるまい。と共に、「せめて大阪中電だけは」、の合言葉も、「八回大会迄は」の相言葉に変わっていった。これは全く淡い一沫の夢にしか過ぎなかった。このことは、中電細胞内に於て、全く従来からの前衛観が根底からくつがえったことを意味する。だがまだ明確に我々自身が、主体的に前衛の担い手として立ち上る所には至っていなかった。

だが事態は一変した。

それはいわゆる白タク事件である。

六一年三月十四日、大阪府委員、市川正一を先頭に、北大阪地区委員の殆んど他に動員されて来た他細胞の連中が、車で中電に乗っ取りつけ、一人の同志を呼び出して、強制連行して、査問にかけよう

ある。

もう何も信じない。自己すらも信じることでできぬ姿、苦しみ、酒にあげくれる姿も皆無ではなかった。

前衛の存在、それは誰しもが否定した。もう裏切られるのはいやだ。もう俺は何も信じない。これが共通した意識であった。

だが、組合活動家として、今迄の職場活動を放棄する事はできるか。

できる範囲の中から、と、共産同系、革共同西派系、及び無党派系を結集して、社会主義研究会が生れた。一方構造改革派は、旧指導部常任委員を中心に、社会問題研究会を作った。だが、相方共長続きはしなかった。

各潮流のセクトの出しあいも原因の一つであるが、また、本質的に、前衛を否定する考えの上に立って、いかなる組織も、まとまる筈はなかった。

一体どこが、我々の要求を満たしてくれるのか、これが根底にあり、それをどこもみたしてくれないとの点が、多くの同志や活動家を政治ニヒルの方向に益々助長させたものである。そこに見られる前衛観は、まだ受身の態度である。労働者が、自ら革命主体として、位置づけ、その限りに於ては納得し得ても、尚も、そこには、それに伴う、諸条件、政治的機能、指導の問題があるし、ただ労働者階級が、革命主体とならねばならぬだけでは、それはあく迄も願望の理論であって、彼岸のものにしかすぎない。だが、日本に於ける社会主義運動をみてみよ。そこには、すべてあるいは国際的權威、あるいはソ連といった、必ず求心物があつた中で行われているのではないか。

安保闘争に於て、見事にあの政治的流動期を作り得た共産主義者

としたのである。

しかも、当日は中電細胞の指導部会議の日であった。午後五時、それは退局時であり、一般局員の退局時に、入口にビケをはって、同志の出でくるのを待ち受ける姿は、全く異常な神経の持主である。両腕をつかまれ、車の方へ連行されようとした同志は、服装を着かえてくる、とうまく逃げる事ができたが、白タクで、局の周囲を徘徊する彼等のため、局より外に出ることはできなかった。

ここに至って、もはや我々は、もう「中電だけは」「八回大会迄は」の相言葉どころか、決意を固めざるを得ず、遂に、三月十九日の緊急細胞総会の席上、「我々が築いてきた中電細胞に対する大衆の不信は致命的となった。上級機関が白タク事件の責任を明確にしない限り、指導を認めることはできない」と結論し、府委員、地区委員の殆んどすべてが参加する異例の会議であったが、そこで、細胞指導部は、その大半が脱党届を提出し、以後、脱党者は、或いは個人個人で、或いは旧細胞キヤップに出したまま離党したのである。

細胞は解散した。しかもその方法たるや、例えば、港地区の如く或いは大正炭鉱、長崎造船、渥美の如く、離党声明を出したのでもなく、一人一人が、勝手にやめてゆく経緯をたどったのである。

今迄、同志として、更に支部決議機関には多数派として存在を誇った我々の前には、もはや昔のおもかげは何もなく、この段階に至って、ばくせんとしてとらえていた前衛観を、いやでもとらえかえず作業に着手せざるを得ない状況に立至ったのである。

すべての生活を、党生活、活動に没入していた同志達、今迄、正しい、革命的であると、それによって生きる事の価値を見出し、いた多くの同志達にとって、それは新たな人生の出発にもなったので

同盟にしてもまた、すでに中央指導部の解体に見舞われた現状の中で、単に大阪中電のみでは、と、誰しもがちゅうちよするのは当たり前なのかも知れぬ。共産主義者同盟に於て中央指導部にあって、あの安保の闘いを指揮した連中ですらも、一度黒寛にたたかれるや、自信喪失、なる程、まちがってましたと、そのもとに走る現状で、意気のみでは運動は展開されないのだ。

だが、殆んど同志は組合の職場に根をおろす活動家として、いづれも安閑としている訳にはいかなかった。六一年夏の支部役員選挙を前に、旧黨員の殆んどが結集して、大阪中電活動者集団を作った。

これには、構改革も（もつとも春日一派とは組織的關係に全くないといわれている）共産同派も、革共同西派も参加した。

だが、革命路線の相違の中で、いかに支部役員選挙に自派をたてるか、或いは活動者集団は、各潮流の統一戦線であるのか、或いは参加は個人単位として、統制権をもつか、全く、一度に又も各派のセクトは表われ、ついに、選挙を闘ったのみで、解散せざるを得ない状況に立至ってしまった。

そして一年を経過せる今、我々には、前衛とは何かについて、現在時点なりに、その困難な組織化の失敗の中から重大な教訓を導き出すことを得た。

「前衛」とは、誰かが与えてくれるものではない。我々自らが、現実の土台に、我々が現在に於ける可能な限りでの情勢分析、持ち得る理論の中で、具体的実践を通して、その機能を發揮して行く過程をめきに、前衛を語っても意味をなさないということである。それは初めに、理論があつて、実践があるという画一的方向ではない。

いずれが先きかあとかの問題ではなく、明らかに、その両者が、同一時点でもらえられ、実践に移し、又その結果を抽象化してゆく作業の中でのみ、理論は真に革命理論たり得るという事である。

レーニンの理論を、その節、章句のみを引きだして、自己の都合のいいようにとらえることは勝手である。だがレーニンの、その章句のみでは、レーニンの思想及び実践の成果を受取り得ないであろう。

レーニンがレーニンたるゆえんは、そのおかれた客観状況に対して、彼がいかなる方針を出していったか、また現実それがロシアの労働者、農民に受入れられていったかが問題なのである。

我々は、この理解に立つ時、始めて、いかに重大な状況におかれているかを認識せざるを得ない。レーニン死後、ソ連はスターリンの一国社会主義論によって、マルクス・レーニンの理論は完全に歪曲された。また、日本共産党に於てもしかりである。その中において、新たに、革命を追求する過程は、いかなる理論（未完成であったとしても）に依拠するかは発想法ではなく、今迄歴史に現らわれた失敗の原因を追求し、そのよってくる根源の把握を、現在時点に於ての運動にいかにか生かしてゆくか、それは当然、現実の状況への介入なしには、解明し得ないであろう。

電通は、今や合理化の先端をゆくものとして、六二年度より、第三次合理化を迎える。この現実の中に、電通労働者として、革命主体の任を自ら引受ける部分として、我々は、遂に、大阪中電労働運動研究会を再度、新たに結集するに至ったのである。

もう、我々は、何物の権威も恐れない。何物もの物神化にも反対する。

そして現在のある力量の中で、階級戦に介入して、自らをきたえ

てゆく。

大阪中電労働結成の成功は、更に電通内に於ての左翼潮流として、全国電通労働の結成に成功した。だが、それだけで事足りりとするのではない。それは地域的にも、全労働者階級の中へ新たな前衛組織を作る一つのサンプルにすぎないであろう。

だが、もっと重要なことは、我々が、ここで到達し得た前衛観である。

前衛とは、何も外にあるものでなく、我々の自らの手で作られるべきものであり、その基本姿勢を排除された場合、それは単なる人形にすぎなくなってくる。

単に、マルクス・レーニンの文章を転用させ、又、実践めきに、いかに自己を革命化させるかの空文句も、我々にとっては無縁である。日共の没理論を、批判検討めきに、更に黒寛の方針、私意を、神の意向の如く、奉持することも、我々には全く関係はない。

泥くさい、土着的発想であるかも知れぬ。

大いに批判は受けよう。だが、我々が、この一年に、幾度となく繰返して来た組織化、その失敗の中からつかんだ、そのものは、全く自立運動の結論だといえよう。

これだけで充分であるとは思わない。

ここでは、中電の労働者が、よくやくつかみかけた「前衛」の概念の成りたちを語ったにすぎない。又、号をあらためて、「前衛」―党の問題についてのべる機会を持ちたい。

（『先駆』2号、六二年三月三〇日）

変革への小さな試み

― 共産主義者同盟関西労働者対策部の新出発 ―

(1) 一九六〇年のなかばに日本を襲った激動は、日本の革命の展望に大きなエポックを劃した。階級斗争の冷酷な試練は、現実の斗争の方向に一つのポイントを与え、共に、階級斗争の担い手をも厳しく淘汰した。「六・二五の栄光と無残」は、政治運動として政治過程における斗争の遂行力のみでなく、諸々の斗争のイデオロギーが現実の試練にどれ程耐え得るかの吟味の舞台となった。その結果汎ゆる党派の斗争遂行力の限界とイデオロギーの破綻が明らかにされた。(注一) 今年に入ってから本格的に発生した構造改革派の日共からの分離も、こうした時期の斗争の結果の一定の反映にほかならない。だが混沌と退嬰にいらどられていくかにも見えるこの舞台にとって最大の収穫は思想的流動状態の発生である。それは、「前衛不在論」として詩的に美化されたりしているが、なによりも科学に対する真剣な態度と思想に対する自由な検討の重要性を導きだした。それは現在の段階では、相次ぐ「ドグマの破産」として見事に現実化されている。

関西に於て、われわれは現実の斗争に関して、局部的な組織力しか持ち合せなかった。しかしながら一切の呪縛と伝説から解放されたわれわれは、この思想的流動状態を最大限に活用して、自己の批判力を研ぐことを最も大きな任務と考える。真理のための斗争こそ階級斗争を闘いぬく第一の保障だからである。

(4) われわれの眼前にある課題の大きさにくらべ、われわれの能力は絶対的貧困に近い。われわれは前衛政党を作りださない過程の中の一つの小さな試みとして自己を位置づけたい。次々と生み落されるイデオログ及び諸々の見解に密着して批判する方法は、自己の能力を考える時、不毛の悪循環である。汎ゆる見解に対して、一定の距離を置いて自己の理論を創造したい。

(注一) 安保斗争における「市民派」の見解がいかに自己偽瞞的であつたかについては、今更言を要しないが、彼らの基本的誤りは「市民民主主義万才」としたことにあるのではなく、大衆運動を進展し、分解し、消滅する過程として、その過程における政治的指導の問題を黙殺したことにある。

又構造改革派の「民主主義革新」が安保斗争によってどれ程達成されたかということは、その後の階級情勢の推移、嶋中事件、政暴法斗争又農基法問題における彼らの連続した総括がなし得ない現実が、論理的帰結でしかなかったことを証明している。

(注二) この点では、革共両派の目指す方向が典型的である。黒田寛一の模索の方向やトロツキーの政治理論の一面面における正当性の弁護に、今日の新左翼の任務があるのではない。

(2) 共産主義者同盟の闘いの総括も、一つの組織的総括としてではなく、個人の自己変革の完成の観点からの総括でもなく、又一面面毎の政治過程の総括でもなく、全体として同盟の現実の指導力の限界が日本革命の展望(第三次綱領草案としてえがかれた)を具体化し得ないものであつたことを、まず確認しなければならぬ。そして、その原因は全体の情勢を統一して把握する観点でなく、同盟―又は新左翼―の出現をいわゆるスターリニズムやその他の諸潮流に対する反翼反対派としてしか、現実に現象化させ得なかつた「観念の狭隘性」(注二)に求められるべきである。この種の左翼反対派的思考との袂別、即ち世界構造と資本主義の危機の把握の方法と、階級斗争の遂行力(大衆斗争と政党)の展望を全体像として掌握することが必須の課題である。

(3) 同時にわれわれの組織は、労働者階級解放のための物質力たるべきである。従つて如何なるイデオロギーも、現実の過程に介入することなくしては無意味である。一つの展望が論理にとどまるか、武器となり得るかは、一に物質化の過程にかかっている。われわれは学生運動が、政治過程で一定の物質化ができたからこそ、その結果として、斗争の徹底化が権力の奪取―プロレタリア独裁の展望に直結することを論理的に証明するだけでなく、日本革命の一つの展望を切りひらく方向として総括できる。従つてわれわれは労働運動において、一職場における組合内左翼としてではなく一つの政治的潮流を形成する努力が、すぐさまはじめられるべき新左翼の最大の任務であると考える。そして、それは社会民主主義的組合指導部に対する原則の対置ではなく、現実の斗争に対する具体的な指針を生み出す努力を通じて物質化されねばならない。